法隆寺

右手が羅漢堂（桧皮葺き屋根）/設計：大岡實建築研究所

南大門（国宝/室町時代）

南大門より西院伽藍を見る

正面が中門

中門（国宝/飛鳥時代）

『４間の柱間は高麗尺(飛鳥尺)で７尺、10尺、10尺、７尺です。これは、ほぼ脇間×1.5が中の間となり中国の建築様式ですが我が国では中の間から脇間にかけては徐々に逓減するのが好まれるようになります』

中の間に比べ脇間が極端に狭くなっているのは荷重の掛かる隅をたった隅木一本で支持するのに無理があるからでしょう。屋根を支えるのは垂木であり飛鳥時代は扇垂木であるのに我が国では写真のように隅部分では効果がない平行垂木に変わるのであります。大きな荷重の掛かる隅屋根の補強対策と中の間から脇の間へ柱間の逓減率を小さくするため、緑枠から一方、それから90度向こうにさらに一方の隅木、すなわち、90度の間に三方の隅木が出る技法が周知であるのになぜ法隆寺再建では採用されなかったのか不思議です。ということは、唐の新建築様式ではなく聖徳太子を偲んで古い飛鳥建築様式で再建されたということになります。我が国では天平時代を始め平安時代の建築は殆どが平行垂木で造立されております。

ただ、中国では扇垂木を使用しているのに中の間に比べ脇間を極端に狭くするのは建物の間口を広く見せようとする視覚上の問題でしょうか。

金剛力士立像・阿形口

金剛力士立像・吽形口

『皿斗とは柱と大斗の間に挟む四角形の厚板で大斗が柱に食い込むのを防ぐ効果的な技法であり、中国では続きますが我が国では間もなく姿を消します。
皿斗を使わないようになると我が国では大斗には桧より硬い欅を使用して解決させております』

皿　斗(法隆寺)

中門と廻廊（飛鳥時代）

境内より中門を見る（注目を浴びる真中の柱）

左より金堂、中門、五重塔

金堂（国宝/飛鳥時代）

議論噴出の隅を支える彫刻付の支柱（下り龍）口

同じく登り龍

五重塔（国宝/飛鳥時代）

これもまさに隅を支えている（邪鬼）

五重塔の相輪

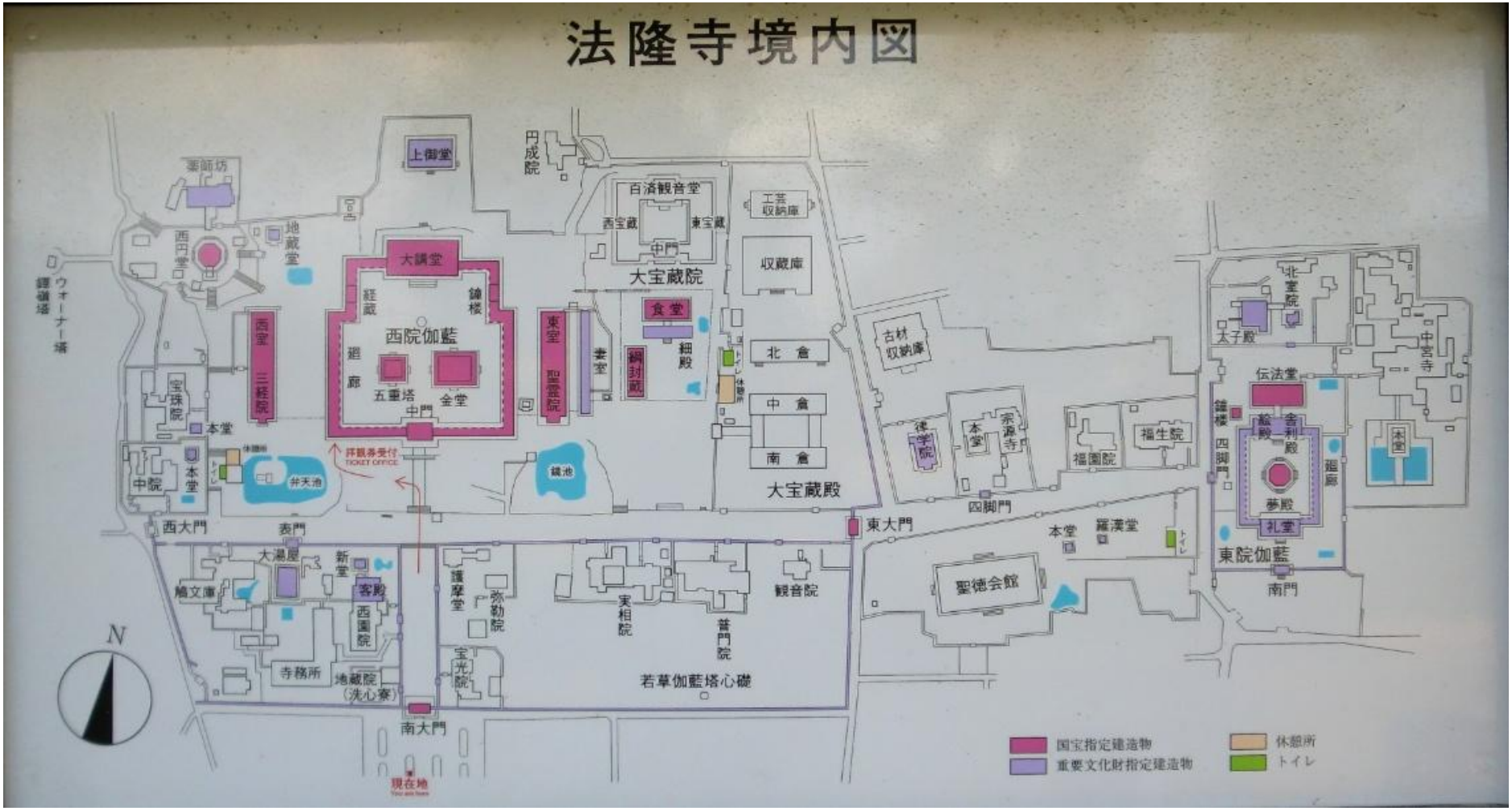
廻廊（国宝/奈良時代）

光の演出が美しい

東院伽藍

夢殿（奈良時代）

夢殿の宝珠露盤



参考資料

http://www.eonet.ne.jp/~kotonara/houryuji.htm

聖霊院（国宝/鎌倉時代）

正面は妻室（重文/平安時代）、左奥は東室（国宝/奈良時代）

正面は鋼封蔵（国宝/奈良時代）

左が食堂（国宝/奈良時代）、右は細殿（重文/鎌倉時代）

食堂

築地塀

古代の塀は「版築」技法で壁面をきれいに仕上げました。

版築とは粘土を棒で突き固める方式で、版築の回数が塀に境界線として残っており、近寄って見れば確認できます。

後の時代には土の中に瓦などを入れるようになります。

築地塀の下部の厚さは１m50cmもあります。木目が表れるように枠板の表面に工夫がしてあります。

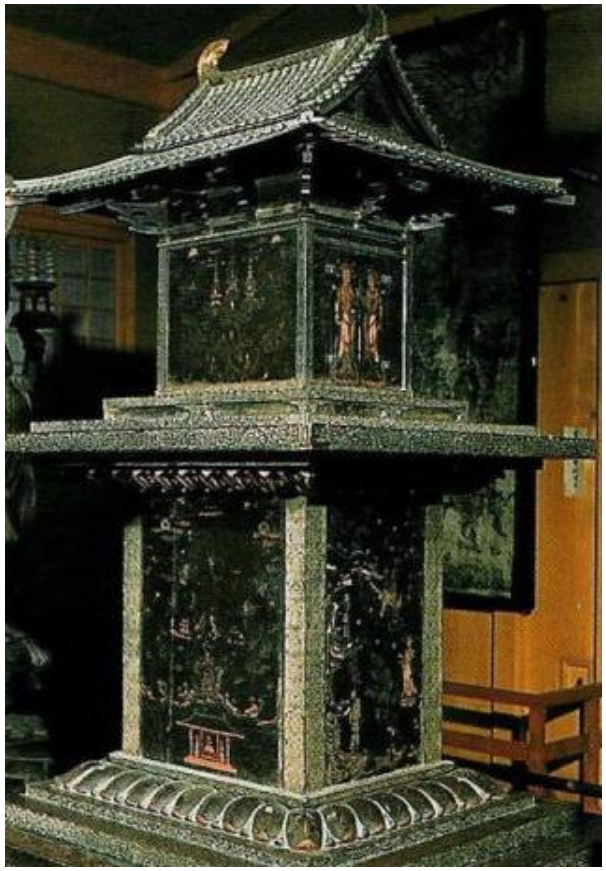
日　本

韓　　国

我が国の古代の建物の色は、青(緑)(連子窓)、朱(木部)、黄(木口)の三色ですが中国・韓国では極彩色で文様装飾されておりました。我が国では良質の桧、杉が得られましたので彩色はせず、素木のままでの建築を望み、文様彩色はせず単色塗装としたのでしょう。柱などに彫刻を入れることなどは考えもしなかったようであります。洗練された簡素な美しさを求めたからでしょう。さらに、日本人の潜在意識には素木も良いですが皮付きの黒木も好む傾向があります。

当時、建築には桧の心材である赤身部分を使っていただけに、今、我々が見るような白い辺材部分をも使用した白い木部の建築ではなく赤みかがった木部の建築だった筈です。

素木の掘立柱、屋根は草葺の簡素な竪穴式住居に住んでいた人々にとって、中国風で装飾彩色の寺院建築を驚嘆を持って眺めたに違いありません。

観音菩薩立像（百済観音）

玉虫厨子（たまむしのずし）